

欧州における若者の自立・就労支援

英国オスウェストリー・キャリア・サービス、Future Movesの取り組みから



日時 2002年8月24日(土)13:30 ~ 16:30

会場 明治大学駿河台校舎研究棟4階第1会議室

報告 住 政二郎(都立大学大学院卒)

Future Movesとは

論文では、イギリス、シュロップシャー州オスウェストリーのユース・キャリア・サービスが実施しましたFuture Movesという取り組みを対象に、制度の側からの自立支援事業がどのようにあり得るのか、またどのような潜在的課題を抱えているのかを書きました。

論文で取り上げましたFuture Movesは、Shropshire Careers Servicesの管轄するOswestry Careers Servicesが1998年3月から1999年12月まで実施しました、若者たちの自立支援プログラムです。このプログラムはオスウェストリー地区やその周辺において所在の不明となった若者、社会的・文化的資源へのアクセスを制限されている若者、家庭の問題や十分な教育や訓練をこれまで受けてこられなかった若者、犯罪歴や薬物中毒経験のある若者の社会参加と自立をサポートする

ために実施されました。このプログラムには16歳を最低に35名の若者が参加しました。プログラムでは若者の一人ひとりの状況とニーズを把握することからはじまり、より地域に根ざした解決策を目指して個人ベースで行われました。詳細については後で触れたいと思っておりますが、Future Movesは、若者たちに直接働きかけるOutreach Workの手法を取り入れ、1997年以降の新労働の教育福祉政策を追い風に、キャリア・サービスの事業を拡大・発展させるとともに、若者たちを支える地域事業をネットワークした先駆的な取り組みであったと言えます。



報告の内容

本日の報告は、大きく4つの部分に分かれています。

一つ目は変化する若者の学校から社会への移行プロセスに注目し、どのような政策がイギリスでとられ、キャリア・サービスに変化を与えているのかについてまとめました。

二つ目は、Future Movesが実施されましたオスウェストリーがどのようなところなのか、地理・歴史などを簡単に紹介し、若者を取り巻く状況がどのようになっているのかまとめました。

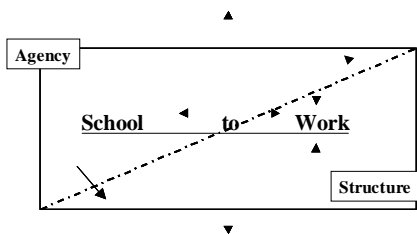
三つ目は、1994年から民営化されたキャリア・サービスとは、いったいどのような企業なのか、そのサービスの内容と制度の抱える潜在的限界性についてまとめました。

そして、最後にFuture Movesとは、どのような取り組みであったのか、どのような成果と課題を地域に残したのか、プロジェクトに参加した若者たちの抱える困難性と提供されたサービスの質に注目しながらまとめました。

それでは報告に入りたいと思います。

変化する若者の移行

Youth Transition from School to Work



すでに多く言われていますように、若者が学校から社会への移行を達成するそのプロセスは、今日大きく様変わりしつつあります。

こうした変化は具体的には、若年層失業率の急上昇、就職難、非正規雇用や不安定就業者の急増という形で確認することができます。先日、9日に文部科学省が発表した平成14年度学校基本調査速報よりみると、平成14年3月の高校卒業者の10.5%にあたる13万8千人、大学卒業者の21.7%にあたる11万9千人が進学も就職もしていないそうです。また、高卒者の就職率は17.1%で過去最低を記録し、大卒者の就職率は56.9%で前年より0.4ポイント低下したそうです。加えて、こうした事態をさらに複雑なものにしている要因として、このゆらぎが、単に学校と社会とのストラクチャルなゆらぎであるだけでなく、若年層の職業意識の変化、のような要素で抜き出される、行為主体、Agencyの側からのゆらぶりとしても確認できることにあるのではないのでしょうか。

「戦後的青年期の枠組み解体」と再構造化

都立大の乾彰夫さんは、日本においては50年代末の高度経済成長期開始以来、40年近く定着してきた若者たちの「子どもから大人へ」の移行の枠組みである「戦後的青年期の枠組み」は、直接的には「バブル」崩壊後の90年代前半から解体しはじめたとしています。

また、こうした現象は日本のみではなく、先進国にほぼ共通する現象であるとし、特に80年代以降、ヨーロッパでは、「戦後的青年期の枠組み」は今や完全に崩れ、若者たちを取り巻く社会的状況は新たに困難な段階に入ったことを指摘しています。そして移行プロセスを取り巻く共通課題として2点、移行プロセスの長期化と複雑化、そして西

ヨーロッパの「福祉国家」、東ヨーロッパの社会主義といった社会システムの解体と「戦後の青年期の枠組み」の解体との連動性をあげています。

そして、この指摘から私が思うことは、1990年以降、一定程度の成熟期を経た福祉国家体制は、その制度的解体を経験しながらも、今や世界的規模で次なるモデルへの、それが単なる解体であるだけでなく、転換期にあるのではないかと、ということです。つまり、社会システムと、学校と社会との接続関係は、ゆらぎながらも再構造化を同時に且つ連動しながら経験する、という新たな段階に入ったと考えています。

具体的には、ノルウェーの *Follow Up Service*、アメリカの *Gear Up*、フランスの *Mission Locales*、20歳以下の若年層に特化したサービスを提供するデンマークなど、先進国に見られるこうした若者の学校から社会への移行を支える公共システムの再構築はその端的な例になると考えます。またこうした社会趨勢は、欧州レベルでは「社会的排除 (Social Exclusion)」の概念と結び付き、教育・訓練・雇用分野は各国の中心課題に位置付けられています。

新労働党の教育・福祉政策

イギリスでは、1997年以降、若者の自立を支援する教育福祉政策の枠組みは、社会的排除の概念と結び付き、従来型の福祉国家から新しい型の福祉国家への飛躍を支える土台として位置付けられています。「社会的排除」の概念は、これまでの伝統的な左翼の貧困、不平等、不利益といった枠組みをつくり変える新しい概念だと言われています。

その内容は、結果の平等から機会の平等

へ、平等を包含 (Inclusion) 不平等を排除 (Exclusion) と再定義し、賃金労働への参加機会の保障と一人ひとりの賃金労働による福祉の実現を目指す、第三の道をとることにあります。

また賃金労働への参加機会を平等に保障するためにも、個人の求職能力の向上と教育・職業訓練への参加が不可欠となります。国家の役割は教育・職業訓練・雇用への参加の機会をすべての国民に提供することであり、そして飴とムチの政策によってその参加を促すことにシフトしていきます。ニューディール (*New Deal*) はその実現の中心政策であり、その基盤を支えるのがコネクション (*ConneXion*) になります。

New Deal について簡単に触れると、主には19歳から25歳未満の6ヶ月以上の求職者手当を受給しているものを対象とする就労支援プログラムで、ジョブ・センターを窓口として行われます。このサービスは単に求人を紹介するだけでなく、ゲートウェイと呼ばれる4ヶ月に及ぶ集中的なガイダンスやさまざまな職業訓練プログラムがセットになっています。

また、*ConneXion* は2001年4月から実施された新しいプログラムで、年齢層としては *New Deal* の下位に位置するもので、義務教育終了年齢16歳を機軸とした13歳から19歳までを包括するプログラムです。*ConneXion* については次で簡単に触れたいと思います。

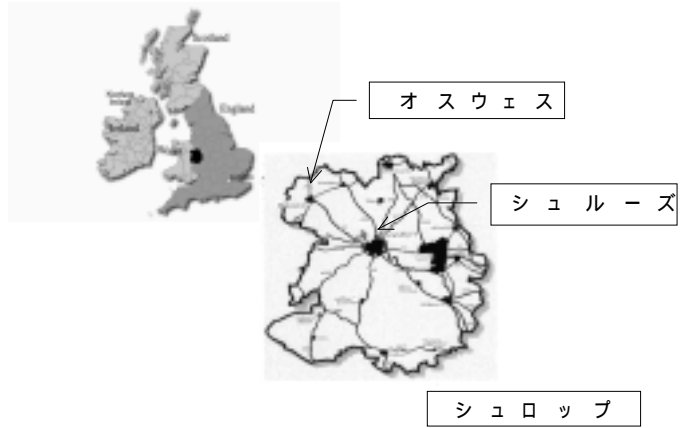
ConneXion とは

ConneXion とは2001年4月からイングランドの16ヶ所をモデル・ケースとしてはじめられたこれまでにない大規模なユース・サービスの総称です。プログラムの対象となる若者

図1



(頁 4) Shropshire Careers Service



は13～19歳のサービスを必要とするすべての若者になります。このサービスの狙いはこれまでの多岐に渡る1点的なユース・サービスをキャリア・サービスを機軸に1本化し、継続的且つ効果的に若者に働きかけようとするものです。コネクションへの統合に伴い、これまで専門分化されていた職業資格もパーソナル・アドバイザー（Personal Adviser）として一元化されることになりました。そしてこのパーソナル・アドバイザーが若者一人ひとりの移行プロセスに対してトータルな責任を持つことにより、特に、義務教育段階に特化することによって、社会的排除、Youth Disaffectionに取り組むための布石になることが期待されています。

シュロップシャー州・オスウェストリー

今回紹介する Future Moves を実施したオスウェストリー・キャリア・サービスを管轄する、シュロップシャー・キャリア・サービスも、Connexionの16ヶ所のモデル地区の一つになっています。シュロップシャー州があるのは、ロンドンの北西、ウェールズとの境になります。

シュロップシャー州・オスウェストリー



少し見えにくいんですが、シュロップシャー州は5つの地域 シュロップシャー北部（North Shropshire）、オスウェストリー地区（Oswestry Area）、シュルーズベリー地区（Shrewsbury Area）、ブリッグノース地区（Bridgnorth Area）、シュロップシャー南部（South Shropshire）に区分され、これにテレフォード&ヴェキン（Telford & Wrekin）が加わります。オスウェストリーの町があるのはシュロップシャー州の北西、ウェールズとの境界から約83のところです。オスウェ

ストリーの人口は約3万4千人になります。

Population in Shropshire	
North Shropshire	52,500
Oswestry Are	34,800
Shrewsbury Are	98,000
Bridgnorth Area	52,300
South Shropshire	41,800
(Shropshire)	282,500
(Telford & Wrekin)	149,900

(資料 source for National Statistics 1999)

シュロップシャー州・オスウェストリー



オスウェストリーの中心地はとても小さく、1時間もあれば徒歩でも十分に1回りでできます。「隠れたイングランド」とも呼ばれるこの地域は、イングランドとウェールズの歴史・文化・言語が交差し特徴ある暮らしを育んできました。

チェスター、リバプール、マンチェスター、バーミンガムといったイングランド中西部を代表する都市部までも近く、ウェールズとイングランドを結ぶ中継地点として重要な役割をオスウェストリーは歴史的に担ってきました。

しかしながら、1960年代以降、産業構造の

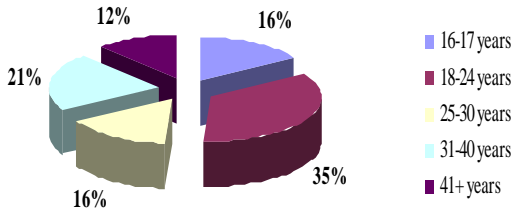
転換による炭鉱業の衰退、1966年の鉄道会社の合併と国有化による鉄道路線の廃止と、加えて1967年のオスウェストリーを感染源とした口蹄疫病の大発生によって60年代以降、オスウェストリーはその経済基盤をすっかりと失ってしまいました。調査期間中もイギリス全土を襲った口蹄疫病の影響で、マーケットは全面閉鎖され、感染の拡大を恐れて周囲の人がオスウェストリーにやってこないだけでなく、乳製品の加工業者、飼料業者、職業訓練コースにも影響を与えていました。

一見すると自然の豊かな素朴な町なのですが、イングランド中西部で4番目に低い賃金水準や低い教育期待、交通機関の未整備がそこで暮らす人々に低い生活水準を強いることにもなっています。オスウェストリーは、イギリス政府によっては特別教育指定地域(EAZ)に指定され、EUからは、今はもうこのカテゴリーは使われていないのですが、貧困地域5bに指定されています。観光客を魅了する豊かな自然と農村地域固有の暮らしを残すオスウェストリーですが、そこで暮らし働く人々にとっては困難の集中する地域になっていることが分ります。



若者を取り巻く状況

Age of HOAP Clients 1999/2000



(資料) HOAP Annual Report & Accounts 1999-2000

同様に、若者たちを取り囲む環境も厳しい状況にあります。町には大型スーパーの他に約250の小さな商店があり、生活に必要な品物はほとんど町の中で揃えることができます。しかし、若者向けの商店や、若者が利用する消費文化や娯楽施設、例えばボーリング場や映画館といったものは何もありません。さらにほとんどの店がビシヤリと17:00には店を閉めてしまいます。17:00以降営業しているのは、セインズベリーかサマーフィールドといった大型スーパーだけで、深夜まで営業しているのはフィッシュ&チップス、ケバブー、レストラン、そしてパブとナイト・クラブだけです。

また、興味深いことにオスウェストリーの中心部には、周囲数D3の範囲に30以上のパブが店を構えています。これはオスウェストリーがマーケット・タウン、炭鉱・採石・鉄道産業の町として栄え、男たちのマッコイな文化を育み支えてきた歴史の証でもあります。しかし今やこうしたパブが、若者たちの高い飲酒率を下支えし、ドラッグの売場の場所となっています。さらに週末の夜ともなる

と、オスウェストリーの町は一変します。パブには多くの人が集まり、パブの閉まる23:00以降は、深夜まで営業しているナイト・クラブに人が集まります。普段は交通量の少ない町の中心地には、客待ちをするタクシーが長い列をつくり、警察も巡回をします。週末の夜には、地域に住む人も町には近付きません。

ユース・ワーカーのミックは、特に若者の飲酒率が高く、やること、行くところない若者たちは、すぐに安いアルコールに手をだす。そして失業、ホームレスになっていくと行っていました。

ドラッグにアルコール、そして週末に繰り返される破壊行為。ミックのいう悪循環に早い段階からはまってしまった場合、家族からの十分な支援を得られず、家からもキック・アウトされるケースが多く、また逆に自立を促すために積極的にキック・アウトされるケースも多いのですが、結果として若者たちはホームレスになっていきます。ここがフリーター現象を家族が下支えしていると言われる日本とイギリスの違いなのではないでしょうか。

次のグラフを見て下さい。グラフはオスウェストリー地区でホームレスとなり、



H.O.A.P. (Homeless in Oswestry Action Partnership) を通して社会的サービスを受けたクライアントの年齢階層別構成比をグラフ化したものです。1999 ~ 2000 年の間にサービスを受けたクライアントは年齢階層別で、16 - 17 歳層が 16%、18 - 24 歳層が 35% と 24 歳以下の若年層が半数以上を占めることが分かります。

また H.O.A.P. でコーディネーターとして働くジャネット・オールフィールドによると、近年オスウェストリー地区では若年層のホームレスが増えているそうです。特に「隠れたホームレス (Hidden Homeless)」の問題は深刻で、彼らは友だちや親戚の家を泊まり歩く「ソファー・サーフィン (Sofa Surfing)」を繰り返しているといえます。

頭にはあったものの、若者たちを取り巻く困難状況はかなり深刻です。若年層の未就労がこれだけ大きく取り上げられながらも目に見える社会問題にならない日本とは異なり、イギリスでは義務教育終了と同時に失業やホームレスになるということがあります。これも階層差があることだとは思いますが、極端に言えば義務教育終了が親の養育責任の終わりともいえる自立に対する圧力があって、学校が終わって仕事しなければ家を追い出されるという子ども達がかかります。後で紹介する Future Moves 参加者の 2 人もそのケースにあたります。そして、ベースとなる家を失った場合、問題がものすごいスピードで深刻化していくということがあります。



キャリア・サービスとは



ここで、少し立ち返って、若干、キャリア・サービスというものについて説明をさせていただきます。あまりここで多くの時間を使いたくはないのですが、キャリア・サー

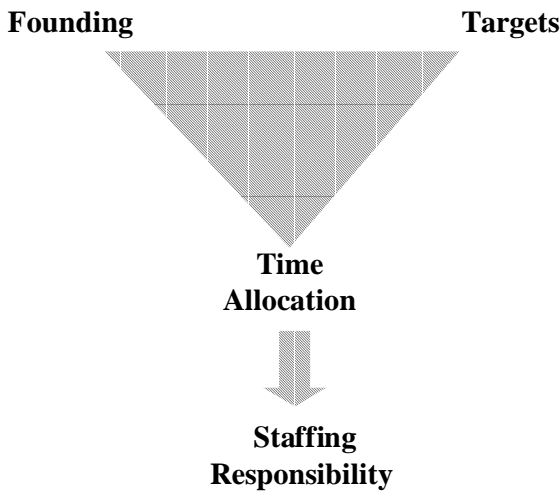
ビスというものがどのような事業を地域に展開している団体で、潜在的にどのような限界を抱えているのかを知ることが、後で Future Moves がオスウェストリーで実施されることになったプロセスを理解するのに役に立つと考えています。

キャリア・サービスについて正確に定義を把握することは、ここ数年の急激な変化、特に ConneXion への統合のため難しいのですが、広義には 13 歳から 19 歳以下の若者を対象に、教育・職業訓練及び職業紹介を行う非営利の民間団体といえます。提供されるサービスには 2 種類、学校サイドで行われるものと事務所を主体に提供されるものがあります。学校サイドの事業には、管轄地区にある中等教育学校に出向き、早くは第 7 学年、ですから 11 ~ 12 歳を対象に行う職業教育の授業や、義務教育終了後、職業訓練に参加する生徒を対象に、生徒と訓練先を取り結ぶトレーニング・プロバイダーを招いて開かれるキャリア・セッションなどがあります。

一方、事務所を主体に提供されるサービスには、主に 16 歳から 19 歳までの若者を対象とした、教育や職業訓練機関の情報提供、職

業紹介があります。サービスを提供するのはキャリア・アドバイザーと呼ばれる専門資格を持つスタッフです。キャリア・サービスは1994年に政府からキャリア・サービス事業を委託される形で民営化されました。

自立支援事業のしくみ



それでは民営化された非営利のキャリア・サービスとはどのような仕組みになっているのか、企業としての利益はどのように考えられているのか、本来、公共的性格の濃い領域に民間企業が政府から委託されて事業を展開する、というのはどのような仕組みになっているのか、ということなのですが、それが非常によく出来ています。

それはどういうことかということ、キャリア・サービスは、政府と契約関係にあります。いわば政府はキャリア・サービスの筆頭株主といえると思います。政府は各自治体との契約に基づいて、Founding、資金、そして「ターゲット」これは数字で明記された達成すべき事業目標と言えます。もう少し具体的に言うと、Aの学校では100人個人面接を行わなくては

はいけません、というのを具体的に学校規模から自動的に算出したものです。そして、この資金とターゲットに加え、Time Allocationと呼ばれる、いわば時間配分を各自治体のキャリア・サービスの本部に投下します。いわゆる各事業を運営していくのに要される持ち時間のことです。この3つは時の政策動向に敏感に左右されると同時に、相関関係をなして、キャリア・サービスの事業の内容と性格を細かく規定しています。そして、各自治体のキャリア・サービスのマネージャーらは、ターゲットを達成するための、これまた資金、ターゲット、時間配分を各事業所に投下します。そこで、各事業所の責任者が、スタッフの担当学校や責任の範囲を決めていく、というふうになっています。

極端な言い方をすれば、政府がどのように教育目標を達成していくか、またキャリア・サービスがどのように企業として事業を目的の届かない現場に行き渡らせ、スタッフを働かせるのか、というのは、この3つを調整することによります。マネージメント・サイドからすればこの3つを調整することによって各事業所の運営をコントロールすることができ、また各事業所にすればリソースをもとに決定したターゲットをヒットすることが自立支援事業の事業内容になってきます。

こうした構造はConneXionにも引き継がれ、むしろ強化される方向にあって、ConneXionの謳う普遍的・一元的な自立支援サービスとは言わば、これまで各エージェンシーで分散されていたターゲットを共有し連帯責任で達成しようとする事業形態であるともいえると思います。

次のスライドを見て下さい。

これはオスウェストリーにある3つの公立中等学校に配分されたターゲットの実数で

	A	B	C
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76			
77			
78			
79			
80			
81			
82			
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94			
95			
96			
97			
98			
99			
100			

す。学校名は伏せてありますが、各学年ごと、事前にHigh Risk、Low Risk、集団面接にカテゴリー分けされインタビューをしなくてはならない生徒の数が決められています。そしてキャリア・アドバイザーはこのターゲットをヒットすることが持ち時間、つまりTime Allocationの中で仕事・責任として課され、その達成度が業績になります。

キャリア・サービス事業の抱える限界性

そして、こうした自立支援事業を現実に当てはめて行くと、どうなるのかというと、もうお分かりかと思いますが、ターゲット外にある若者、時間配分内では支援しきれない若者、また、そもそもキャリア・サービスの事業の枠外にある若者には、サービスを提供することができなくなってきます。そして結果的に、サービスを一番必要とする層に十二分なサービスを提供することができず、毎年、若者たちの抱える問題だけが深刻化していくということがこれまで繰り返されてきました

た。ここに、キャリア・サービスに対して批判的な目を向ける人たちの根拠があります。この問題は、ある種、特に西欧諸国で、公共的な領域が事業として制度化し、専門分化されながら民営化されてきた国に共通する問題なのではないでしょうか。

次は、Future Moves を立ち上げ、その中心的役割を果たし、当時、オスウェストリー・キャリア・サービスの支店長であったジャネットとのインタビューからの抜粋です。インタビューは、当時のオスウェストリー・キャリア・サービスについて聞いたものです。

「私がここで働いていて1つ気が付いたことは、キャリア・サービスは学校内では多くの仕事を上手くやっていたのだけれど、学校外の場面で、特に問題を抱える若者にはあまり上手く働きかけることができていないということです。これはキャリア・アドバイザーになる前にやっていた仕事の影響が強いだけだけれど、当時は今よりもキャリア・アドバイザーはフォーマルな感じがして、机を挟んで若者と決まった時間話をするだけという具合でした。だからいつもキャリア・サービスはもっとオープンに、且つコミュニティで、これまでとは違った場面や方法で仕事をする必要があると考えていました。コミュニティには決まって毎年6人から10人のサポートが必要とされる若者たちがいて、彼らは1度や2度、1時間半のインタビューにはくるけれどもそれっきり。2週間に1度、サポートの必要な若者に連絡を取ることが規則で決められているけれども、彼らがフォローアップ・レターに何の返事もよこしてこなければ、これも規則で彼らは連絡の必要な若者のリストからは外されることが決まっています。そうになってしまうとキャリア・アドバイザーは彼らに何も働きかけることができなくなってしまいます。そうした若者のために割ける通常

勤務以外の時間もない。またそうした若者たちを私たちは『ドーマント (Dormant)』と呼んでいて、そんなことが繰り返し起こっていました。」

さらに、興味深いのは、インタビューの中でジャネットが触れているドーマント (Dormant) です。ドーマントとは、キャリア・サービスの持つ業務規程の1つのことで、キャリア・アドバイザーにはサービスが必要とする若者の所在を2週間に1度確認する義務があります。しかし、その際、何らかの理由で連絡が取れなかった場合、若者にはフォローアップ・レターと呼ばれる確認通知が送付されることになっています。このフォローアップ・レターが送付されるのは2度までで、それ以降何ら連絡も取れない場合は、その若者がこれ以上のサービスを必要としないと判断されドーマントとカテゴライズされます。これは休眠しているとか、火山が休火山である、という意味で、1度このドーマントにカテゴライズされてしまうと、それ以上の働きかけはキャリア・サービスとしてはすることができません。それが業務規程で決められているんです。

以上のように学校外でのケアを必要とする若者たちが目の前にいながらも、当時のキャリア・サービスの枠組みではそうした若者たちにサービスを提供することが十分にできず、時間だけが過ぎ問題だけが深刻化して行く、ということが毎年繰り返されていました。こうした背景が、若者のところに直接出かけて行くアウトリーチ・ワークの必要性をジャネットの中に想起させ、キャリア・サービスの枠組みを越えたFMの取り組みへとつながっていきました。

35名の若者たちとFuture Movesの取り組み

義務教育終了				
	男子		女子	
進学	3	14%	4	29%
職業訓練	1	5%	2	14%
就職	5	24%	2	14%
失業	2	10%	1	7%
Moved Away	2	10%	0	0%
Not Available (had a baby or others)	2	10%	0	0%
Unknown	6	29%	5	36%

(資料)ropshire Careers Services

FMは、アウトリーチ・ワークの手法を取り入れた、これまでにない新しいサービスでした。このプログラムには16歳を最低に35名の若者たちが参加しました。35名の内訳は男子が21名、女子が14名です。参加者の2001年10月現在の平均年齢は男女共に19.3歳です。表はFM参加者の義務教育終了後の進路別統計になります。表から一見、職業教育も含め進学率が高いように見えますが、そのなかには3ヶ月以内に退学したものが男子で2人、半年以内に退学したものが女子で1人います。

FMの取り組みを通しては、1対1の支援を基軸に、関連諸団体を活用したさまざまな支援が提供されました。度重なる家庭訪問と電話連絡、そして献身的なケアのあり方は、従来のキャリア・サービスにはないものでした。また、今回調査を通して、若者たちが共通してFM期間中、求職者手当を受給しているということが分かりました。これはFMの参加者全員に共通することで、つまり、一定の期間、制度的な裏づけのあるプログラムに参加しているという事実が、進路未決定の若者たちにジョブ・センターへの求職者手当の申請を可能にするということです。親からの支援を期待できない若者たちにとって、こ

これは大切な現金収入で、キャリア・サービスにとっては、若者たちをサービス内に引き止めておく大切なインセンティブになります。そして、FMを通して面談を繁茂に行い、アクション・プラン、これは履歴書の代わりになるものですが、を更新して行くことは、若者にとっても、また、キャリア・サービスにとっても、求職者手当を申請し続けて行くために重要な条件になってきます。就職活動もままならない若者たちに、制度的な裏づけを与えることによって、現金を支給し自立の道を互いに探って行く。FMのプログラムにはこうした側面もありました。

Future Moves後の若者たち

プロフィール 終了時				
	男子		女子	
進学	0	0%	1	7%
職業訓練	2	10%	1	7%
就職	9	43%	1	7%
失業	2	10%	3	21%
Moved Away	2	10%	0	0%
Not Available (had a baby or others)	1	5%	3	21%
Unknown	5	24%	5	36%

(資料)ropshire Careers Services

単純にターゲットをヒットするこれまでのキャリア・サービスの枠組みを越え、アウトリーチ・ワークを採用し、若者たちの自立支援を目指したFuture Movesは、地域の自立支援事業をネットワーク化するなどの、一定の成果を地域に残しました。しかし、同時に、多くの課題を残した取り組みでもありました。プログラムの途中で連絡の途絶えてしまった若者、プログラム実施期間中には進路先の決まらなかった若者、またそうした若者

たちも含めてプログラムの終了が、困難を抱える若者たちへの働きかけの終わりとなっていることが調査を通して分かりました。また、FMに参加した多くの若者が、男女共にFM終了後も進路を確定することができず、再び失業や所在不明となってしまうことが分かりました。

表は、キャリア・サービスのデータ・ベース、プロフィールの最後に記憶されていたFM参加者の到達地点です。男女共に、記録が途中で途切れてしまっていて、絶対数が減少しているだけでなく、FMを経ても再び「失業」、「所在不明(Unknown)」となる割合が高く、特に女子の場合は出産を経験するケースが目立ちます。

なぜこうした困難はFuture Movesを経ながらも繰り返されてしまうのでしょうか。3人の若者に注目してFuture Movesの取り組みをもう少し詳しく見て行きたいと思いません。

3人の若者たち

調査を通しては、3人のFM参加者にインタビューを行うことができました。男子2人、女子1人で、インタビュー当時、ジョン・クラークは20歳、トーマス・ステッドマンは19歳、ケイト・エドワードは19歳でした。ケイトには現在6ヶ月になる子どもがいます

トーマスは、中等教育段階からプロのギタリストを目指していました。地元にも友人も多く、音楽以外には格闘技にも興味があり、一時はプロのキック・ボクサーになることも目指していました。現在は、冷凍食品会社で箱詰めの仕事をしなが、家の庭先にあるキャラバンで生活をしています。彼の仕事とヘビーな音楽、そしてハードな生活は、オ

スウェストリーのマッチョな男子文化そのものと言えます。

トーマスとは対照的に、ジョンは物静かで、自然と動物が大好きなオスウェストリーの若者の中でもめずらしいタイプの若者です。地元で就職することをずっと希望していましたが、内向的で、こうした性格が小さなコミュニティでの進学や就職を難しくしていました。

最後に、ケイトは35人の若者の中でも特に支援の必要とされた若者です。早くからインフォーマルな仲間集団に引き付けられ、ドラッグやアルコールに強く依存し、傷害未遂、窃盗事件も起こしていました。女子の場合、学校やフォーマルな移行プロセスからのドロップ・アウトが、妊娠・出産につながるケースが多く、ケイトはその典型といえます。

次に一人ずつその特徴を見ていきたいと思えます。

ジョン・クラーク

ジョン・クラークは、同世代の若者の中でも珍しいタイプで、地域志向の強い若者でした。義務教育を終了してからは、しばらくの間、自然環境や動物の飼育コースを、農業系のウェルフォード・カレッジで受講しました。しかし、同じコースを受講しているのが女子ばかりで、結局コースに馴染めず、すぐに退学してしまいました。今は、ジョンの出身校でもあるリン・パーク・スクールで、ケア・アシスタントとして学校内の清掃とメンテナンスの仕事をしています。

インタビュー当時、ジョンは母親と弟との3人で、オスウェストリーの北に位置する、仕事場のリン・パーク・スクールからも程近い、

セント・マーチンという名の小さな村で生活していました。両親は離婚していて、父親の所在は知らないと言っていました。母親も失業経験があり、家庭の基盤は強いとは言えません。

FM期間中は、彼の意向を尊重し、地元就職の道が探られました。しかし、ジョンのケースの場合、彼の困難性は失業や貧困といった具体的な問題ではなく、彼自身の進路に対するあいまいさにありました。ここで、時間の関係上、残されたマニュアル・レコードを紹介することはできませんが、進学にも職業訓練、就職にも振り切れず、Future Movesのスタッフを悩ませている場面を多く見ることができます。

しかし、ジョンの進路に対するこうしたあいまいさを裏から見れば、彼が移行プロセスや進路観を確かなものにして行く移行資源に非常に限られていた、ということが指摘できるのではないのでしょうか。それは家庭の基盤であったり、経済力、人間関係、文化資本、情報などがあげられると思います。もともと家庭の基盤が弱く、移動の困難な地域に住み、また、同時期に移行を形成して行く仲間にも彼はめぐまれませんでした。学校ではいじめに会い、こうした経験が彼を私的な世界に閉じ込めると同時に、同輩集団圧力の強いオスウェストリーでの進学や職業訓練への参加を難しくしている、ということを感じました。

トーマス・ステッドマン

次にトーマスですが、彼は19歳。オスウェストリーの中心地から、車で20分ほど走ったところにある小さな村で暮らしています。両親は離婚し、母親と弟(12歳)の3人で生

活をしています。父親の所在は、ジョン同様に知らないと言っていました。

トーマスに会って印象的だったのは、彼が家の庭、庭といってもほとんど森みたいなところですが、にあるキャラバン、電気水道はもちろん付いていませんよ、で生活していることです。最初は、すぐ近くにある彼の家でインタビューをしながら、ここは僕の家ではない、ここには住んでいない、キャラバンで生活している、ということの意味がわからなかったのですが、卒業後、ギターリストになることだけを目指し、就職も進学もしないトーマスを母親が家に置いておくことを拒んだ結果だそうです。母親のいない時だけ、家に戻って身の回りのことを済ませる生活をしています。

インタビュー当時は、週に6日、土曜日以外、午後の4時から深夜12まで1日8時間、オスウェストリーの工業団地内にある冷凍食品会社で箱詰めの仕事をしていました。収入は週に約21003、だから約37,000円ぐらいでしょうか、稼いだお金は、オスウェストリーを出て新しい生活をはじめのために貯めているそうです。シュロップシャー州の中心地、シュルーズベリーに移り住み、ギターの講師の仕事を得るということが、彼の中期的な目標です。

Future Movesを通しては、当時、ホームレスであった彼に、まずもって安全に住める場所と十分な食事、最低限の衣服を用意することに時間が割かれました。しかし、彼がホームレスになったことは彼の自立を困難化させただけでなく、キャリア・サービスや関連諸団体からの働きかけをも困難化させていきました。

そして、話を聞いたり、マニュアルレコードを調べながら分ったことで、なるほど、と

思ったのは、トーマスへの支援を難しくしたことに、もう一つ、彼が時間や約束が守れない、ということがあります。みなさんは疑問に思うかもしれませんが、この時間や約束が守れないということは、若者たちに共通していて、若者たちの抱える困難性の一面をとてモリアルに表していると言えます。Future Movesを通して、その調整にたくさんの時間がついやされていました。

ケイト・エドワード

次に、ケイトのケースですが、彼女は19歳で、インタビュー当時は、生活保護を受けながら、自治体の提供するフラットで6ヶ月になる子どもと生活をしていました。結婚はしておらず、子どもの父親となる男性とは別れていて、パートナーとなる男性は現在服役中でした。ケイトはFM参加者の中でも、特別のケアが必要とされたケースで、義務教育終了後は、1カ月あまりカレッジに通いますが退学してしまいました。

中等教育段階から問題行動の目立ったケイトがカレッジを退学すると、両親はケイトを見放してしまいます。そして彼女は友人の家をとまりあるく生活を続けるようになります。彼女がFuture Movesに参加したのはそんな時期で、ケイトの場合、さらにケアが必要になったのは、Future Moves参加中に起こした、傷害未遂事件以降でした。事件はナイフによる恐喝だったのですが、それが新聞報道され、彼女のことを狭いコミュニティで誰もが、学校、職業訓練校、雇用主を含めて知るようになりました。この事件以後、彼女の困難性はより深刻化し、同時に彼女への支援も困難化していきました。

日常生活は、「全部子どものため」とい

と3人とも義務教育終了と同時にすぐその移行プロセスが不安定で非連続なものになっていることが分ります。こうした不確かな移行プロセスは、彼らのキャリア・イメージや進路観が未形成なのではなくて、彼ら・彼女らが、進路観や移行プロセスを確かなものにして行く、選択と機会構造と、移行を形成して行くために不可欠な資源、家庭、職業資格、情報・知識、空間・関係性などに極めて限られていることをも証明していると思います。

ジョン、トーマス、ケイト、そしてFMに参加したすべての若者たちが見せた移行プロセスの不安定性と非連続性は、それは単なる未就労やモラトリアムのプロセスなのではなく、彼ら・彼女らの形成する移行が極めて資源に限られていて、かつそのプロセスが常に失業と貧困とに隣接されたものであることを物語っていました。

Future Movesの取り組みと若者たちを支えたもの

ここでもう一度、自立支援に話を戻したいと思います。Future Movesはこれまでのキャリア・サービスの枠を越え、地域の自立支援事業をネットワーク化するなど多くの成果を地域に残しました。しかしながら同時に、Future Movesは、キャリア・サービスの実施した自立支援事業としては多くの課題を残した取り組みでもありました。プログラムの途中で連絡の途絶えてしまった若者、プログラム実施期間中には進路先の決まらなかった若者、またそうした若者たちも含めてプログラムの終了が、困難を抱える若者たちへの働きかけの終わりとなることが調査を通して分かりました。また、FMを経ながらも多くの若者たちが進路を確定することができ

ず、再び所在不明や失業となってしまうことが分かりました。それでは、FMの取り組みは若者たちの自立を何ら支援するものにならなかったのでしょうか。仮にFuture Movesが若者たちにとって意味あるものであったのだとすれば、それはFuture Movesのどのような側面なのでしょう。

次はFuture Movesでアウトリーチ・ワーカーとして採用されたウェンディーとのインタビューの記録です。若者たちの困難性を目の当たりにしながらも、キャリア・サービスの1部として結果の求められるウェンディーの引き裂かれて行く様子と、でありながらもプログラムの持っている枠組みをずらし、ギリギリのところでFMを実践としてつないでいった様子が表現されています。少々、長いのですが、読みます。

「本当のところは、35人、全員の仕事を見つけることはできなかったわ。何人かは上手く見つけることができたけど。でもこの問題を1日で解決することなんて無理なんです。若者に関してだって、すぐに会って全部を話してくれるわけじゃないし、本音を語ってくれるわけではありません。前にあなたがうえからくる政策のことをいっていたけど、それがリアリティーなんです。もし私の仕事若者たちに仕事、学校、職業訓練を見つけることならば、それが限界なんです。でも、まず



やらなければならないことは、彼らに雨風のしのげる場所、安心して眠れる場所を探してやること。中には虐待を受けている子もいるから。彼らは簡単には心を割って話してはくれないし、体も汚れていて臭う時だってあるわ。だって彼らは外で寝泊りしたり、または家に入れてもらえなかったり、温室で犬と一緒に寝かされていたりするのよ。中には誰か話を聞いてくれる人、力になってくれる人、信じてくれる人が必要な若者もいるわ。一切、評価を下さない人が。私たちはFuture Movesをやったわ。でもそれは時間のかかることです。若者を見つけて、サービスについて知らせて、ネットワークをつくって。すべては一夜漬けではできません。彼らは約束も守らないし、大人のことを尊敬もしていないし、大人も自分たちのことを尊敬していないと思っています。空振りなんて何度もあります。それで他の方法を探すけれども、その方法が確かなわけではありません。話を聞くのに3週間や1ヶ月かかる時もあります。やっと問題が分かったら、はじめて働きかけることができます。レンガを積みあげるようなもの。35人すべてにすばらしい結果が待っているわけじゃありません。それでも中には2年たった今でも電話をかけてくれる若者もいます。刑務所から手紙を書いてくれる若者もいます。難しいのは何を政府が望んでいるのか、何をプロジェクトが望んでいるのか、どんな結果を出さなくてはいけないのか、どうやってお金を使わなくてはいけないのかってことを知ること。それとどうやって本当に若者を助けることができるのかってこと。ジャンネットと一緒に働きはじめたばかりの頃に、若者にとって意味あることをっていったのが印象的で、まだ頭に残っているわ。多分それは政府のためじゃないんだろうけどね。」

ここにFuture Movesのコアになる部分が上手く表現されているのではないのでしょうか。自立支援事業としてはFuture Movesは目に見える成果を残すことは出来ませんでした。しかし、若者たちの抱える困難と対峙し、キャリア・サービスの持つ枠組みをずらしながら、また、キャリア・サービスとしては評価にならない場面を多くつくりながら、そして沢山の割を食いながらも切り捨てずにつないで行った若者たちとの関係性にこそ、FMの本体はあるのではないのでしょうか。毎日、キャリア・サービスにお茶を飲みに来ていたケイト、必要なことは何でもしてくれたというジョン。これまで家族からも見放され、何らサービスの網の目にかからなかった彼らをもう一度働きかける対象として地域に位置付けなおしたこと、これがFuture Movesの成果なのではないのでしょうか。

Future Movesの成果と課題

これまで見てきたようにFuture Movesの取り組みは、キャリア・サービスの専門とする学校、職業訓練、仕事の紹介ではなく、キャリア・サービスの枠を越えて一人ひとりの若者との関係性を軸に提供される質的支援にその骨格がありました。こうした質的支援のあり方が地域の自立支援事業のネットワーク化などの成果を残すことにもなりました。こうした取り組みを経て重要であったことは、これまでドーマントとして地域の中で、目の前にいながらも見えなかった若者たちを、支援の対象としてもう1度地域の中に位置付け直したことだといえます。義務教育終了と同時に非連続の移行の谷間に匿名のまま落ちて行き、その後、何ら支援を期待することができず、自力でその空間を抜け出すことを強いら

れる若者たちに名前を与え、支援を提供するといった取り組みは、これまでのキャリア・サービスにはない取り組みでした。

しかしながら、こうした新しい取り組みが、新たな課題をキャリア・サービスに、そして地域に残すものにもなりました。それはFMを通して作られた対個人、自立支援事業間の関係性が、自立を支えて行く制度、または仕事まで高められることなく、関係性のレベルで終わってしまっていたということです。こうしたことから、せっかく一度、支援の対象には成りえなかった若者たちを支援の対象に位置付け、ネットワークの中に取り込みながらも、自立を具体的に支えるものにも、表象される困難性の根に横たわる社会的排除に取り組むものにもなり得ませんでした。

以上のことから、対個人の関係性と関係性のネットワークを媒介としながらも、ゆるやかに、且つ確かに若者たちを移行の次の段階に接続して行くオルタナティブな回路の構築が必要とされているのではないのでしょうか。そして、その若者たちの自立を支援するオルタナティブな回路が、めぐってはコミュニティの抱える社会的排除の問題に取り組むことになる、そうした循環的な支援のあり方が必要とされているのではないのでしょうか。

ここに残され課題は、関係性を媒介とした従来のキャリア・サービスにはない質的支援のあり方の可能性を提示していると同時に、社会的排除に自立支援という側面から、どのように関わるができるのか、ConneXionに引き継がれるべき考察課題を先駆けて提示してもいいと思います。

報告は以上です。ありがとうございました。